プラトンの体育論序説——
Respublica Ⅲ, 403c9－412b1

高　橋　雅　人

一

人間には心と身体とがあるという把握は、素朴なものであるかもしれないが、最も基本的なものであり、それゆえおそらくそう簡単には消え去ることはないだろう。そしてその把握が続くかぎり、心と身体との関係が問われ続けることになると思われる。

この把握はそれが何を意味するかはともかく、プラトンにとっても自明なものである。そして心と身体のそれぞれを教育するものとして音楽と体育があるというのが、プラトンの『国家』における教育論の第一歩であった（*Resp.* Ⅱ, 376e）。

これ以後に展開されている音楽論（あるいは文藝論）はホメロス批判を含み、詩人追放論につながるものを持つこともあって、多くの論争と批判を引き起こしてきた。しかし体育についてはそれほど論じられてはこなかったと思われる。これはある意味で仕方がないことかも知れない。教育は音楽と体育によるべきであり、これらのうちどちらか一方が欠けても不十分であることをプラトンは主張しておきながら、音楽についての論述は広範囲にわたり分量も多くを占めるのに対して、体育についての論述はステファヌス版にしてわずか10ページほどだからである（以下、この部分を「体育論述部」と呼ぶ）。そればかりか、その10ページの中でも体育が直接扱われている部分は半分足らずで、むしろあるべき医術とそれに並行して司法について論じられている部分の方が多

い。音楽の扱い方に比べるとこの体育の扱い方は、ほとんど無に等しいと言われても仕方がないのではないか。人はここに身体を蔑視するプラトン主義の臭いを嗅ぎつけるべきなのであろうか。

だがこの「体育論述部」の間に体育の把握は急激に変化している。冒頭では体育はすぐれた身体を作り出すために必要だと語られている（403c9ff.）のに、終わりの部分では体育は音楽と一緒になって心のためのものだと言われているのである（410b5ff.）。このことはいったい何を意味するのであろうか。あるいはどのような意味でプラトンの主張を理解することができるのだろうか。そして体育について論じていない「体育論述部」の半分あまりの部分は、「体育論述部」にとってどのような意味があるのだろうか。

これらの問いに答えるためにプラトンの「体育論述部」についての検討が必要である。本論文は以上のような観点から『国家』第三巻403c9－412b1（すなわちこれが「体育論述部」である）を分析する。そしてそれによって、一見論理的なつながりが希薄に思われる「体育論述部」を統一的に読み解く解釈を提示し、さらに体育と音楽の技術としての特徴を析出する。このことはプラトンの技術観や、心と身体の関係を明らかにすることに役立つだろうと期待される。

二

「体育論述部」の分析に入る前にプラトンの対話篇全体において体育を意味する語（*γυμναστική*）がどのように使われているかを検討してみたい。

ブランドウッドの索引によれば、*γυμναστικός, ή, όν* という形容詞は全部で77例ある[1)]。そしてその77例を作品別に見れば、多い順に、『国家』30例、『法律』21例、『ゴルギアス』13例、『プロタゴラス』、『ソピステース』、『政治家』、『ティマイオス』各２例、『クリトン』、『パイドン』、『饗宴』、『パイドロス』、『エウテュデモス』各１例、となっている。

それらの用例のほとんどで、体育は別の技術と必ず対になって、あるいは対

になる文脈で、用いられている。その技術とはある場合には音楽であり、別の場合には医術である。

例外となる用例は『プロタゴラス』の一例（316d9）と『エウテュデモス』の一例（307a5）である。

『プロタゴラス』の一例はプロタゴラスの発言のうちに用いられているから、プラトン自身の体育論をそこに見いだすには不可能とは言えないまでも周到な手続きを必要とする。だがその手続きはたとえ可能であったとしても、無意味である。なぜならその箇所では、ソフィストの術を隠すための技術の一つとしての体育についてプロタゴラスが言及しているからである。この用例は考察の対象から外すことが妥当である[2)]。

『エウテュデモス』では体育は「金儲けや弁論や将軍の術」と並んで言及されている。この箇所でソクラテスは、人間を教育すると称している人たちにろくなものがいないというクリトンの慨嘆を受けて、立派な技術であってもそれに携わる人々で優秀な者はわずかしかいないと答えている。この問答では、体育そのものが論じられているわけではなく、技術と技術者（あるいは似非技術者）との関係が問題になっている。それゆえプラトンの体育論を検討するというわれわれの目的にはそぐわない。

以上のことからわれわれは体育についてプラトンが論じるときには医術、または音楽と対になる仕方でそうしていると結論づけることができる。さらに興味深いことに、体育と対となる技術は対話篇によって決まっている。体育が音楽とペアを組むのは『国家』と『法律』であり、その他の著作ではすべて体育と医術との対なのである。このことはいったい何を意味しているのであろうか。

まず、体育が医術と対となることについて検討しよう。そのためには用例の多さが『国家』『法律』に次いでいること、それゆえ当然ながら体育についてあるまとまった見解を示していることから『ゴルギアス』を取り上げるのが適当であろう。

『ゴルギアス』では弁論術とは何かという規定をソクラテスがポロスに説明する箇所で主に体育についての言及がなされている。ソクラテスによれば人間の心と身体を扱う技術はそれぞれ二つあり、その技術の下に潜り込み、その潜り込んだ先の技術であるかのようなふりをしている迎合（単なる経験）がそれぞれある。身体の世話をする技術は体育と医術であり、それぞれの下に潜り込む迎合は化粧法と料理法である。それと同じように、心を扱う技術として立法術と司法術とがあり、それぞれの下に潜り込む迎合としてはソフィストの術と弁論術とがある（462b－466a）。

このソクラテスの説明は、技術は知識によって対象の善を目指すが迎合は憶測によって快を目指すということに基づいて、弁論術が技術ではないことを主張しようとするものである。このソクラテスの議論の中で、身体を扱う二つの技術、つまり体育と医術とは、弁論術は技術であると主張するポロスに対して、技術とはいかなるものであるかを示す役割を果たしている。言い換えれば、技術の成立とはどのような事態であるかが語られている。体育が医術と対になるのはまさにこの文脈である。技術が技術それ自体として考察されるときに、体育と医術とは一対のものとして語られるのである[3)]。

では『国家』と『法律』の場合はどうだろうか。これらはどちらも政治を一つの主題としている書であるという点では『ゴルギアス』と同じだが、「理想の国を言論においてつくり上げる」という点で異なる。そして「国をつくる」という観点から必然的に国民の教育が論じられることになる。体育と音楽が語られるのは、まさにこの教育という文脈である。子供たちの教育は音楽と体育という二つの技術によるべきであるから、それらの技術がどのように用いられるべきかが論じられているのである。これは技術が適用される場面での議論である。

技術を論ずる際には、技術それ自体と技術の適用という二つの観点があり、体育は前者に即して医術と対に、後者に即して音楽と対に語られるのである[4)]。

しかし、以上のような議論に対して、そもそも技術とは適用されてこそ技術なのではないか、適用なき技術はないのではないか、という疑問が生じるだろう。『ゴルギアス』では身体の世話をし、最善（健康）を目指すのが、体育と医術という技術であると言われていた。語の用法を見るかぎり、体育が技術それ自体として論じられている対話篇（『ゴルギアス』）と技術の適用の文脈で語られている対話篇（『国家』と『法律』）とが截然と分けられるにしても、体育が医術と対になることと音楽と対になることとの違いは他の理由があるのではないだろうか。

このことに関しては体育の意味づけが変わることが重要であるように思われる。先に指摘したように、身体のためとして議論に導入された体育は、心のためとして、言わば、変貌を遂げる。このことが体育の対が医術であるか、音楽であるか、の違いを生んでいるのではないだろうか。医術と対になって語られているとき体育が関わる対象は身体であるが、音楽と対になって語られるとき体育は身体のみならず、心にも関わるのである。このことを技術それ自体と技術の適用という先の二つの観点を交えつつ言い直せば、技術がそれをめぐって成立するその対象と、技術がそれのために用いられるその対象とは異なるのであり、体育の場合、前者は身体であり、後者は（身体と）心であるということになる。

とはいえ、ここで問いが消滅するわけではない。技術がそれをめぐって成立するその対象と、技術がそれのために用いられるその対象とは、本当に区別されるのか。他の技術の場合にはそのような事態があるとは考えにくい。いったいなぜ体育の場合はそのような事態が生じるのだろうか。この問いに答えられたとき初めて、体育の対となるのが音楽であるか医術であるかがどのような基準によって分けられているのかが、明らかになると思われる。

以上のような問いを抱えつつ、体育と音楽、医術の三つの技術の連関に注意しながら、次節でプラトン『国家』の当該テキストの検討をしていくことにしたい。

三

検討するテキストは、繰り返せば、『国家』において体育がまとまって論じられている403c9－412b1、つまり「体育論述部」である。この部分は、その内容にしたがって以下のように三つに分けられる。便宜上（α）、（β）、（γ）と名付け、内容を表す小見出しをつけることにする。

（α）身体のための体育（403c9－404e6）

（β）医術と司法（405a1－410a6）

（γ）心のための体育（410a7－412b1）

（α）ではすぐれた戦士・守護者のすぐれた身体をつくる体育はどのようなものでなければならないかという問題が取り上げられ、先に音楽について述べたのと同じように、単純な体育が良いと結論づけられる。「音楽における単純さは心のうちに節制を、体育における単純さは身体のうちに健康を（Ⅲ, 404e4－5)」生むからである。

（β）では医術と司法が論じられる。医術としてはアスクレピオスが称賛され、ヘロディコスが批判される。司法の問題としては良き裁判官は悪を自ら体験する必要はないことが論じられる。

（γ）では体育は身体のためにというよりもむしろ心の気概的な要素のためになされるべきであり、そのように昔の人々は教育を定めたと語られる。

われわれが検討している箇所をこのように三部分に分けると、次の二つのことが奇異なこととして浮かび上がってくる。第一に、体育とは直接関係のないように思われる議論が（β）で展開されており、しかもその分量が全体の半分以上を占める。第二に、その（β）を挟んで体育の意味づけが「身体のため」から「心のため」に移行している。このことはいったい何を意味しているのであろうか。

第一の点については、（β）の部分は「逸脱」であるという診断がなされており[5)]、第二の点についてはソクラテスが身体をけなしているためであるとい

う解釈が提出されている[6)]。果たしてこのような診断と解釈は正しいであろうか。

最初に、第一の点を考察していくことにしよう。そのためにはまず（α）から（β）への議論の移行を検討する必要がある。

なぜ医術と司法に議論が移動するのだろうか。(β)はやはり逸脱であり、(α)から（β）への議論は唐突に折れ曲がっているのであろうか。しかしながら、(β）への移行はソクラテスの質問によって導かれている（405a1）ので、単に「逸脱」であるとは考えがたい。そしてもし「逸脱」ではなくて議論の必然性によるならば、体育の意味づけが変わったことに（β）の議論が関係していると解釈する可能性が出てこよう。

とはいえ、このわれわれの推測を否定するようなことが、まさに（β）の箇所で行われているのではないかとも考えられる。前節での議論によれば、教育という文脈では体育は音楽と対になるのであって、医術とではない、ということであった。ところが、(β）では体育との関連で医術が論じられているのである。守護者の教育という大きな文脈の中で、まず音楽が論じられ、次にこの体育論で体育が論じられていて、さらにその中で医術が取り上げられている。このことは、技術の成立と適用とによって体育の対が医術となるか音楽となるかが決まるという前節の暫定的な結論を覆すものではないかとも思われる。

だが事はそう単純ではない。なぜならば『ゴルギアス』などとは違って（β）では医術は否定的に扱われているからである。つまり、医者にかかって健康を回復するよりも、体育によって健康であり続けるほうがよりよいのであって、良い教育の行き渡ったポリスでは医者をそれほど必要としない。医療所の多さはそのポリスの内で放埒が行き渡ってしまっていることを意味するのである(405a1－4)。

実はこの点に関連するものとして、(α）の冒頭、つまり体育論の冒頭に次のような注目すべきことが語られていた。

体育によってもまた子供の頃から生涯を通じて（*διὰ βίου*）入念に養育されなければならない（Ⅲ, 403c11－d1）。

一見、どうということもないように思われるかもしれないが、音楽による教育と比較すると「生涯を通じて」ということが異なる点として浮上する。体育論は音楽論とは違って生全体（*βίος*）への視点があるのである。もちろん音楽による教育が最初に行われるのは、初めが肝心だからであり、その限りにおいて生全体への視点を持つと言える。しかしながら、守護者達はのちに数学的諸学問や哲学によって教育されるべきなのであり、音楽が生涯にわたって課せられるのではない。それに対して体育は「生涯を通じて」なされなければならないと言われている。

音楽と体育との間に見られるこの違いは、それぞれの関わる対象の完成する時期が異なるからであろう。身体の完成する時期は心の完成する時期よりも早い。別の言い方をすれば、身体の完成より心の完成のほうがより時間がかかる。子供の時に与えられる音楽は心の完成への過程の最初を扱うのであって、もちろん大事ではあるが、心を最終的に完成する（徳が現成する）ためには音楽だけでは不足である。様々な学問を身につけ、さらにそれらを「序曲」とする哲学が必要なのはそのためである。これに対して体育は身体の完成に直接関わるがゆえに、その人の生涯の問題となる。

そして体育には生全体への配慮が欠かせないというこのことが、人の医術への関わり方を決めることになると考えられる。体育によってすぐれた身体が作り出されてしまえば、けがなどのやむを得ない場合を除いて、健康が維持されるがゆえに、医術（あるいは医者）の世話になることは原則として必要がなくなる。これに対して、もしそのような身体を持たなかったならば、慢性的な不健康状態のまま一生を過ごさなければならなくなる。このような人のために考案されたのがヘロディコスの養生法である。

「病気のお守りをする今日の医術（406a5－6）」を導入したヘロディコスは、

「体育を医術と混合（406a8－b1）」し、「死を長引かせる（406b4）」ことによって本人自身をも多くの人々をも疲れ果てさせることになったという。ヘロディコスは長生きをする代償にいっさいの仕事をあきらめざるを得なかった[7]。体育と医術の混合は、自分の身体だけに関心を向け、しなければならない仕事や自己の修練としての哲学に邁進しないようにしてしまう。プラトンが批判するのはまさにこの点である。

このように見てくると、（α）から（β）への移行は唐突なものではなく、議論の自然な流れによることが、そしてそれゆえに（β）にも意味があることが、明らかになるように思われる。

議論の流れに関しては、体育が生全体の観点から検討されることによって、どのように生きるべきか、という問い、あるいは、どのように死に対処するかという問いが問われることになる、と解釈することができる。そしてこの問いに対するプラトンの答えは、「良く[8]生きること」、具体的に言えば、単に長生きするのではなくて、国家に自分の仕事によって貢献しつつ生きることである。

そのような良い生を生きるためにも体育によってすぐれた身体を作り上げることが重要になる。そしてそれに成功したとき、けがなどのやむを得ない場合を除いて、医者にかかる必要がなくなるだろう。こうして（β）では体育と医術との価値的序列を明らかにしている。体育と医術とのどちらも身体をめぐって成立する技術である。しかし、医術は失われた健康を回復するための技術であるのに対して、体育は健康をもたらし維持する技術である。それゆえある意味では体育は医術よりもすぐれているのである。これが（β）の議論の内容に関して言えることである。

それでは（β）から（γ）への移行はどのように説明されるであろうか。（β）が「逸脱」でないと解するためには（α）から（β）への移行のみならず、こちらの連関もまた説明されなければならない。

（β）と（γ）に共通する要素は「混合」であり、そしてこれがこの二つの部

分を連結するものであるように思われる。(β) においてはヘロディコスが体育と医術とを混合したことが批判されていた。それに対して (γ) では体育と音楽の混合が次のように語られる。

> 音楽と体育とを最も見事に混ぜ合わせ、最も適切な仕方で心に適用する人、その人をこそ、絃を互いに調律する人よりもはるかにすぐれて、完全に最も音楽的教養があり (*μουσικώτατον*) 良き調和のとれた人であるとすれば、われわれは最も正しく主張することになろう (412a4－7)。

これは「体育論述部」のほぼ末尾に位置する言葉である。ここでは体育と音楽の混合が見事になされなければならないことが語られている。

二つ以上のものが混合されうるためには何らかの親和性がなければならないだろう。水と油のように全く異質のものは混ぜ合わすことができない。ヘロディコスが体育と医術とを混合することができたのは、先に見たようにその混合は批判されるのであるが、どちらも身体に関わる技術であったからだと考えられる。とすると体育と音楽の混合が可能であるのも、同じように、それらのどちらも適用される対象が同一であるからではないだろうか。音楽が心のためになされる教育の一過程であることはすでに認められているのだから、身体のためと考えられてきた体育が実は心のためであると把握し直されることによって、音楽と体育との混合が語りうるようになるのである。

以上のような考察によって、われわれは (γ) における音楽と体育の正しい混合を導き出すために、体育と医術という悪しき混合を語る (β) が先立つのだと結論づけることができるだろう。そしてこのことによって、(β) は身体のための体育が語られる (α) と心のための体育が語られる (γ) とを繋ぐ重要な部分となっていることが理解される。生全体の観点から体育を把握することが医術との価値の序列の議論を導き、さらに体育と混合している当代の医術の批判へと至る。そしてこの批判があるべき混合、体育と音楽との混合の結論

を生み出すことになる。そしてその過程で体育は「身体のため」から「心のため」へと捉え直されることになるのである。

四

（β）の意味づけというテキスト解釈としての問題は、前節において（β）は「逸脱」ではなく（α）から（γ）への移行を促す重要な部分であると答えられた。この節では続けて音楽と体育の混合についてもう少し考察してみたい。

体育と音楽の混合の重要性が主張されるのは、どちらか一方にのみ勤しみ、親しんでいる人々が偏った人間になっているという事実の観察に基づいている。その観察によれば、体育だけに関わり、音楽や学問に触れない人は言論嫌いの粗暴な人間になる（411c－e）が、他方、音楽にのみ心を奪われ体育による鍛練を受けない人は気難しく、短気な人間になる（411a－c）。そのようにならないために、体育と音楽との適切な混合が称揚されるのである。

これら二つの技術の混合が善きものとして成立するのは、気概の素質と哲学的素質という二つの要素を持っている心がその混合をつくるそれぞれの技術の対象であり、かつそれら二つの素質が適切な仕方で調和されることが心にとっての善さだからである。先の観察から明らかなように体育は心の気概的素質に関わる。それゆえ体育に勤しむ人は初めのうちは「気概に満ち、自分よりも勇敢になる（411c6－7）」が、学びや探究を味わうことがなければ、最後には暴力的な無教養の人間になってしまう。また音楽にのみ耽溺する人は、もとからあった気概を弱めてしまい、気概のある人間ではなくて、短気な人間になってしまう。守護者はこのどちらになってしまってもいけない。守護者には気概の素質と哲学的素質の調和が求められるのである。

しかしながら、以上のような議論は、その他のところで見られるプラトンの技術観と矛盾するのではないかと疑われる。例えばすでに触れたように『ゴルギアス』では技術は対象の善を目指すと言われていた。もし体育が心の善を目指すのであれば、体育にのみ勤しむ人もその良さに与ることができるのではな

いか。また『国家』第一巻によれば、技術はそれ自体として完全であり他のものを必要としないからこそ、技術それ自体の善ではなく技術が関わる対象の善を目指す（341e－342e）。とするならば、心に関わる体育や音楽はそれらが技術であるかぎり完全であるはずなのに、なぜそれらが関わる心を損ねてしまうのであろうか。それともこれらの技術は不完全なのであろうか。いや、不完全な技術とは形容矛盾であろうから、体育も音楽も技術ではないということになるのだろうか。

この困難を解決する鍵は（またしても）混合である。次のテキストを見られたい。

> 音楽を身につけたものはその同じ跡にしたがって（*κατὰ ταὐτὰ ἴχνη ταῦτα*）、もし望むのであれば（*ἐὰν ἐθέλῃ*）、体育を追求することを選び、そうしてやむを得ない場合でなければ、医術をいっさい必要としなくなる（410b1－3）。

体育と医術の価値づけがここでも行われているが、混合という観点から着目すべきは次の二点である。第一に、音楽が体育に時間的に先行して適用されなければならない。音楽と体育との混合には前後関係という秩序がある。しかも先行する音楽の「跡にしたがって」体育が追求されなければならない。第二に、より重要なこととして、音楽を身につけたもののすべてが体育を追求するわけではない。音楽を身につけたものは「もし望むのであれば」体育を追求することを選ぶ。この第二の点は音楽と体育の混合にはそれら相互の間に秩序があるという第一の点よりもより高次のものである。すなわち、音楽が先行するように、しかも「同じ跡にしたがって」探究するように、秩序づけるものが存在する。

音楽を身につけたものが体育を追究しようと望むことは、音楽によって教えられることではない。音楽にのみ耽溺し、体育に触れることのない人がいるこ

とがその証拠である。では、自然本性的に人は音楽を身につけたあとに体育に向かうようになるのであろうか。だが自ずから人が音楽の次に体育へと「その同じ跡にしたがって」いくことができるのであれば、教育について考察し、規定を定めることは無意味であろう。それゆえ音楽を身につけた人のうちには体育への望みはあらかじめはないと考えられる。

体育への望みが喚起されるには、体育の必要性を示すことができ、しかも音楽と「同じ跡にしたがって」追求すべきであると教示することができる人が必要である。その人こそ「音楽と体育とを最も見事に混ぜ合わせ、最も適切な仕方で心に適用する人」であり、「完全に最も音楽的教養があり、良き調和のとれた人」と呼ばれるにふさわしい人である（412a4－7）。この人は、音楽と体育との混合と、それの心への適用について知識を持っていなければならない。それゆえ、その人は、おそらくは、『国家』の以下の諸巻でそのありようを規定される〈哲学者〉である。そして〈哲学者〉にして初めて、音楽と体育とを超えており、それらを適切な仕方で混合し、秩序づけることができる。

以上のように考えることができるならば、われわれは先にぶつかった困難を次のように突破することができるだろう。体育や音楽はそれぞれ技術であり、技術であるかぎり、完全である。すなわち、それらが関わる対象である身体と心とを善いものとする。しかし、〈哲学者〉によってそれらの技術は互いに適切な仕方で混合されるとき、より大いなる完全性を有するに至る。すなわち、体育に関して言えば、音楽と組になることによって、身体のみならず、調和のとれた心を形成するのに役立つことになる。そしてこのとき初めて体育はその働きを完全な仕方で果たすことができる。音楽についても、同じように、それらは心の完成する過程の初期に適用されるとき、心のその後のありように決定的な影響を与える。その時期以後は、体育と組になることによって、心全体のより大いなる成長に役立つこととなる。このような技術の言わば高次なものへの変容は、それら技術と心とについて知識を持つ〈哲学者〉によってもたらされるのである。

音楽と体育が混合されることによってより大いなる完全性を持つのは、それら混合されたものの対象が心と身体の二つからなる人間という一つの全体であるからのように思われる。心と身体はわけて扱うことができる。だからこそ体育と音楽はそれぞれ別のものとして成立する。しかし人間は一つの全体として生きており、それゆえ全体を促える視点もまた必要である。そして心が身体に先行するという事態をふまえつつ、人間を一つの全体として捉えることによって初めて明らかになる事柄もあるだろう。そのような事柄を扱うことができるのが〈哲学者〉に他ならないというのがプラトンの「体育論述部」の明らかにしていることなのではないだろうか。

その〈哲学者〉とはどのような人であり、そして哲学とはいかなるものであるか、についての論究はまた別になされなければならない[9)]。

【註】

1）cf. Brandwood [1976], p. 191. ただし、偽書とされる『アルキビアデスⅠ』『クレイトポン』『テアゲス』『恋がたき』の用例は除く。

2）ただし、この箇所でプロタゴラスがヘロディコスに言及していることは、注意されてよい。言うまでもなくヘロディコスは『国家』の体育論の箇所で批判されているからである。この点については本文三節を参照。

3）このことは他の箇所でも確認できる。cf.『ソピステース』229a1－2.

4）アダムは体育と医術は連関するという註をつけているが、これは誤りではないにしても、不十分であるとわれわれの議論は示している。cf. Adam [1963], p. 176.

5）White [1979], p. 100.

6）Bloom [1991], p. 364. ブルームは「ソクラテスは身体をけなすあまり、最後には体育は身体に全く関係ないと否定的に述べている」と言う。しかし、たとえソクラテスが身体をけなしているとしても——私にはそうは思われないが——体育が身体に全く関係ないというのは行き過ぎである。

7）言うまでもなくこれは尊厳死の問題である。

8）この文脈では人は国家に役立つ人であるか、自分の素質にふさわしいものとして課せられた一つの仕事をなすかどうか、が問題になっているゆえ「善く」ではなく「良く」の字を当てた。

9）お読みいただいた方にはお分かりのように本文には「女性」や「男性」についての言及は皆無である。『女性学評論』に掲載されているのに由々しきことだ、と批判されるであろうか。ただ弁明をさせていただければ、ここに扱った「体育論述部」は性の区別なく適用可能なものである。第五巻で女性の教育が問題になるときに、男性と同じ教育が課せられなければならないとプラトンが語るからである（456b）。そして本論の結論を支持するかのように、国家が女性にも男性と同じ教育を課すようになるためには、〈哲学者〉が王とならなければならないと言われている。もちろん以上の「弁明」は、プラトンの体育論が本論で論じたことで尽きると主張するものではない。プラトンの体育論のより深い理解のためには、第五巻で語られている戦争と体育がいかなる関係にあるかが解明される必要があろう。本論に「序説」と付されているのはそのゆえである。そしてその解明によってこそ初めて、女性と男性との体育をめぐる差異が明らかになると思われる。以上のことについては他日を期したい。

【引用文献】

・Adam [1963] : *The Republic of Plato I*, edited with Critical Notes, Commentary and Appendices by James Adam, 2 nd edition with a New Introduction by D. A. Rees, Introduction & Books I–V, Cambridge University Press, Cambridge.

・Bloom [1991] : *The Republic of Plato*, translated with notes and an interpreted essay by Allan Bloom, 2 nd. ed., Basic Books.

・Brandwood [1976] : Brandwood, Leonard, *A Word Index to Plato*, W. S. Maney & Son Limited, Leeds.

・White [1979] : White, Nicholas P., *A Companion to Plato's Republic*, Basil Blackwell, Oxford.

Summary

Plato on Gymnastics: Introduction—— *Respublica* Ⅲ, 403c9–412b1

TAKAHASHI Masahito

It is well known that Plato insists in the Books Ⅱ–Ⅲ of his *Republic* that guardians' education should be consisted of both music and gymnastics. While one of these, i.e. music (or poetry), is widely and thoroughly argued in this dialogue, the other, i.e. gymnastics, is much less discussed. However, this does not lead us to the conclusion that gymnastics is not so important for the education.

In this paper I analyze 403c9–412b1 of *Republic* Ⅲ, 'the gymnastics part', with two purposes: first, to show the unity of 'the gymnastics part', which is at first sight seemed to have a digression; second, to clarify the feature of gymnastics in Plato's educational system.

Before analyzing 'the gymnastics part', I check how Plato uses the word 'γυμναστική' (gymnastics) in all of his dialogues. According to these data, when he argues art as itself (as in mainly *Gorgias*), he always treats gymnastics with medicine. On the other hand, when his concern is about the application of art (as in *Republic* and in *Laws*), Plato never discusses gymnastics without music.

In the next section I propose the unity of 'the gymnastics part', which can be divided into three segments. This reading shows that the second segment (405a1–410a6) is not digressive but significant for our understanding of Plato's treatment of gymnastics. The reason why he discusses medicine here is that gymnastics is important not only for childhood and youth but also for a person's whole life in order that one does not need physicians except unavoidable

wounds or seasonal diseases. And Plato's critic against Herodicus, who mixed gymnastics with medicine, is to be linked with the final segment (410a7–412b 1) in which he tells us that the mixture of gymnastics with music is good and desirable.

In this blend the other and main purpose of gymnastics is newly uncovered. In the first segment (403c9–404e6) gymnastics is said to be for physical strength, but in the final it is declared to be for psychic harmony. The last section of my paper deals with the question how and by whom gymnastics can be mixed with music. That a 'philosopher' can mingle the two arts most befittingly with his wisdom is my answer.